



日本語の視覚表現における虚構移動

松本, 曜

(Citation)

日本語文法, 4(1):111-128

(Issue Date)

2004-03

(Resource Type)

journal article

(Version)

Accepted Manuscript

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002171>



日本語の視覚表現における虚構移動

松本 曜 (明治学院大学)

要旨

日本語の視覚的な知覚を表す言語表現には、本来物体の移動を表すのに用いられる言語表現が使われることがある。このような表現が表す移動は知覚者の視覚経験の中に存在する虚構移動 (Talmy 1996, 2000)であり、それには視覚的放射、映像の移動、注視点の移動の三種類が認められる。これら言語表現は私たちの身体による視覚経験を反映している。

キーワード 視覚表現, 移動, 虚構移動, 経験的基礎

Fictive motion in visual expressions in Japanese

Yo MATSUMOTO (Meiji Gakuin University)

Abstract

Japanese expressions describing visual-perceptual events often contain lexical items used for describing physical motion. The nature of such expressions is explored. It is argued that such expressions are based on ‘fictive motion’ (Talmy 1996, 2000) that is evoked in the visual experience of the perceiver. Three kinds of fictive motion can be recognized in Japanese visual expressions: visual emanation, movement (and processing) of visual image, and movement of the point of visual attention. The patterns of expressions based on the fictive motion reflect the nature of such motion as experienced by our body.

Keywords: visual expressions, motion, fictive motion, experiential basis

1. はじめに

視覚的な知覚を表す文には、本来物体の移動（あるいは移動の使役）を表すのに使われる表現がしばしば現れる。たとえば、(1)では経路の起点、着点を表す後置詞句や、移動や移動の使役を表す動詞が使われている。

- (1) a. 太郎はその窓から山の方を見た。
b. 富士山が目に飛び込んできた。
c. 花子はその子に目を移した。

このような表現はどのような意味での移動を表しているのだろうか。

視覚的な知覚を表す言語表現（以下視覚表現）に何らかの意味での空間的な移動が関与していることは、かねてから指摘されてきたことである。たとえばグルーバーらは、英語の視覚動詞 *see* が移動動詞としての性格を持つと論じている(Gruber 1967, Goldsmith 1979, Jackendoff 1983)。また、タルミーは、認知意味論の立場から、英語の表現に基づいて、視覚表現には現実には起こっていない虚構移動(*fictive motion*)が関与しているとしている (Talmy 1996, 2000)。

本論は、タルミーの洞察を出発点として、日本語の視覚表現にも同様の虚構移動が関与することを指摘し、その表現の性質について考察するものである。関与する移動には三種類が認められる。視覚的放射、映像の移動、注視点の移動の三つである。この分類はタルミーの分類に手を加えたものだが、最後のものについては、タルミーとはやや考え方が異なる。

以下、これらの表現の考察の中で、三種類の虚構移動が現実（客観的に）起こっている移動ではなく、知覚者の視覚経験の中に生じるものであり、またそれを表す言語表現が、経験される移動の性質を反映していることを明らかにしていく。その一方、このような認知的な動機付けと同時に、これらの表現は日本語という言語の言語的な制約も受けていることも論じる。

なお、日本語の視覚表現に関しては、鳶原 (1983)、田中 (1996, 1999, 2001) などの先行研究があるが、ここで扱うような移動の問題を正面から扱っていない。目にとまったもので唯一研究対象が重なるのは、山梨がここで扱う表現の一部をメタファーとの関係で論じている論文である (Yamanashi 1997)。本論の分析と山梨の分析の相違点は、関連する箇所であらうと触れていくことにする。

2. 視覚的放射

2.1 視覚的放射の表現

まず取り上げるのは、視覚的放射と呼ぶケースである。私たちが対象を見るとき、私たちの目からその対象にむかって何かが放射されるように感じる。視覚表現に表れる移動の表現には、このような視覚的放射に基づくと考えられるものがある。次のような例である。

- (2) a. 部屋の中から窓越しに外を見た
- b. その子に目を注いだ。
- c. 空を見上げた。

(2a)では、視覚的放射の経路が後置詞句「～から」「～越しに」によって示されている。ここでは視覚行為を表す動詞「見る」が使われているが、他にも「眺める」「覗く」「睨む」「見える」などもこのような後置詞句とともに使うことができる。²

(2b)では、放射物を「目」という語で表し、放射の行為を「注ぐ」という動詞で表していると考えられる。「目」の代わりに「視線」が使われる場合もある。このような例には以下のものがある。

- (3) {目／視線} を注ぐ, {*目／視線} を送る, {*目／視線} を投げかける, {*目／視線} を浴びせる

また、次のように、「目」「視線」を主語とする表現も可能である。

- (4) {目／視線} が届く

ここでは「目」や「視線」が移動物であるかのように表現されているが、もちろん、目（眼球）や視線が移動するわけではない。目から出ると考えられる放射物が視線に沿って移動するのである。しかし、その放射によって知

¹ このほか、「見る」などの動詞と共起するカラ格句の性質については、荒 (1983) , 渡辺 (1983)に言及がある。

² 「～越しに」は、物理的移動よりも視覚的放射の経路を表すために使われることが多い。たとえば、『新潮文庫の 100 冊』にある 1960 年代以降に出版された 15 の作品を調べてみると、「～越しに」の 20 の例のうち、15 は視覚的放射の通過点の例である。

覚者の関心がその対象物に寄せられる時、知覚者の一部としての目がその対象に向かって移動（延長）するかのように感じられる。また、視線は放射によって作られ、またその視線に沿って放射物が連続的に送り出される。そのため、あたかも視線を連続的（流動的）に対象物に送り出しているように感じられる。このような関連性によって、「目」「視線」が放射物を表すのに使われるのである。その意味で、これはメトニミーによるものであると言える。なお、「注ぐ」「投げかける」「浴びせる」のように本来液体や小さい固体の集合体を目的語として取る動詞が使われるのは、視覚的放射物が流動体のように感じられるからだと思われる。

(2c)で使われている動詞は、視覚行為を表す「見る」と使役移動を表す「上げる」が複合した複合動詞である。この場合の「上げる」は放射の行為とその方向性を表している。複合動詞で視覚的放射を表すものとしては次のものがある。³

(5) 見上げる、見下ろす、見渡す、見やる、睨みつける、覗き込む
これらに共通しているのは、前項動詞の目的語が複合動詞全体の目的語になることである。つまり、「空を見上げる」の「空」は「見る」の目的語であって、「上げる」の目的語ではない。「上げる」の意味上の目的語は視覚的放射物であると思われるが、それは意味的には存在していても、動詞の文法的項としては表現されないのである。

視覚的放射の存在は、以上のような後置詞句や動詞以外にも、「中」「外」という名詞の用法の中にも見ることができる。まずは、これらが視覚動詞とともに使われた(6)の例を見よう。

(6) a. 太郎は窓の外を見た。

b. 次郎は鍵穴の中を覗いた。

(6)で視覚の対象となっているのは、窓の外部、鍵穴の内部ではなく、窓を通して見た家の外の景色、鍵穴を通して見た部屋の中である。ここでノ格名詞

³ 「睨みつける」に関しては、松本 (1999)も参照。「覗き込む」の「込む」も他の例と同じく他動詞であるという分析が可能である。この点に関して別の機会に回さなければならない。

句は視覚的放射の通過点を表していると考えられる。

同じことは、次の文においてもいえる。

- (7) a. 窓の外に富士山が見える。
b. 窓の外には富士山の姿があった。

いずれの場合も富士山は<窓を通して見た家の外>に存在している。⁴

「窓の外」などのノ格名詞句が視覚的放射の通過点を表すとするのには、次のような根拠がある。まず、「窓の外」などの表現は、普通の「中」「外」の表現とは異なる点がある。ここで普通の「中」「外」とは、(8)のように、それを修飾するノ格名詞句が、閉じた空間かあるいはその外郭（の全体）を表す場合である。

- (8) a. 部屋の {中／外}
b. 柵の {中／外}

「窓の外」「鍵穴の中」はこれとは異なり、その閉じた空間の外郭の特定部分がノ格名詞句として使われている。これが可能なのは、その部分が閉じた空間の内外を結ぶ移動の通過点であると考えられる場合のみである。したがって、(9)に示すように「門」「ドア」などはノ格名詞句として可能でも、「壁」は特定のコンテキストが与えられなければ不可である。⁵

- (9) {門／ドア／入り口／窓／*壁} の外

「門」などの場合は実際の物理的移動の通過点であるが、「窓」は多くの場合、視覚的放射の通過点と見なされる。

⁴ (7a)のように「見える」などの視覚動詞が、位置句を取ることができることは興味深い。多くの場合、私たち視覚的情報によって物体の存在や位置を確認する。視覚動詞が位置句を取ることができるのはこのような背景がある。（対照的に私たちは聴覚によって物体の存在や位置を確認するのは難しい。「聞こえる」などが位置句を取ることができないのはこのことを反映している。）また、逆に(7b)のような存在を表す動詞の文に視覚的放射が関与するのも、位置認識と視覚との関連性を物語っている。なお、視覚動詞の存在動詞的な性質に関しては、薦原（1983）、田中（1999）に考察がある。

⁵ 「壁」は、音の経路の通過点を表す場合は使うことができる。

- (i) この壁の外から大きな音が聞こえた。

また、「窓の外」などは、実際に視覚的放射がそこを通過すると考えられる場合にしか使うことができない。(10a)と(10b)を比較してみよう。

(10) a. 家の外に男が立っていた。

b. 窓の外に男が立っていた。

(10a)は話者（この状況の知覚者）が家の中にいても外にいても使うことができるのに対し、(10b)は話者が家の外にいる場合には使いにくい。使えるとすれば、外に立っている男を家の中から見ることを想定している場合であろう。いずれにせよ、内側からの視覚が前提となっている。⁶

なお、視覚的放射の表現（及び後に見る注視点の移動の表現）の一部は、視覚を触覚として理解し表現するメタファー表現として扱われることもある（Yamanashi 1997）。英語においても類例が EYES ARE LIMBS（目は手足である）というメタファーの中で扱われている（Lakoff and Johnson 1980）。確かに「目が届く」（あるいは後に見る「目を離す」）などはそのような例として考えられるかもしれない。また、目の延長としての放射物がある対象に達することは、確かに伸ばした手が何かに触れることと平行しているように思われる。しかし、ここでみた他の表現の多くは触覚とは無関係の表現である。その意味では視覚的放射という概念を用いた方が、広い用例について扱うことができると言える。

2.2 視覚的放射の経験的基礎

このような視覚的放射は、全くの虚構の移動である。現実の世界では目から対象に何も移動していない。この移動は私たちの経験の中にしか存在しないものである。それではなぜ、このような移動が感じられるのであろうか。

まず重要なことは、私たちは視界にあるすべてのものに均等な注意を払うわけではないということである。私たちは特定の対象を視界の中心に置き、それに注目する。そのとき、目とその対象との間が線で結ばれる。そして、

⁶この種の「～の外」の用法も、視覚的放射の移動に多く使われる。「～越しに」と同じ調査をこの句に関して行ったところ、移動の通過点をノ格名詞句として取る 68 の「外」の例のうち、42 が視覚的放射の通過点と見なせる場合であり、物理的移動の通過点は 11 に過ぎない。

私たちがその対象に興味を持って見るとき、私たちの方からその対象に心理的に近づこうとするなど、働きかけを行う。また、特に私たちが人を見るとき、目の表情を通して、その人に対する態度など、さまざまな情報を送ることになる。このような結果として、私たちの目からその対象に対して何かが動くように感じられると考えられる。

視覚的放射の表現は、このようにして視覚経験の中に生じる移動に基づくものであると言える。

3. 映像の移動

3.1 映像の移動の表現

さて、前節の場合とは逆に、視覚対象から目への方向の移動に基づく表現もある。まず、(11)について考察しよう。

(11) 富士山（の姿）が目に {飛び込んできた／入った}。

ここでは目が移動の着点として表されている。移動しているものは何かといえば、それは（「姿」という語が表しているように）視覚的映像であると思われる。

「目に飛び込む」「目に入る」については、次のようにカラ格句を使うこともでき、移動の方向性が確かめられる。

(12) a. 木々の間から、富士山が目に飛び込んできた。⁷

b. 目をつぶってしまえば、どこからも何も目に入ってこない。

また、「壁」が四面の壁全体を指す場合は、閉じられた空間の外郭全体を指す用法と考えられる。

⁷ (12a)で「目に入った」はやや不自然である。これは「入る」が起点句に要求する制約のためと思われる。「入る」が起点句と共起する場合、その起点は二格名詞句が表す領域の比較的近くになければならない。次の文を考えてみよう。

(i) ?正面玄関からトイレに入った。

正面玄関からトイレに直接はいることができれば、この文はやや不自然である。

(12a)で「目に入った」が不可能なのは、木々と目との間の距離により、この制約が満たされないからと考えられる。

これらの表現は、視覚的映像が眼球の外から中に入ってくると考えられる場合にしか使えない。たとえば、次のような場合には使うことができない。

(13) 目をつぶると、今でもその懐かしい風景が{目に見える／*目に入る}。
このことも、視覚対象から目へという移動の方向性を物語っている。

「目に入る」に関しては、異なる分析が Yamanashi (1997), 田中(2001)によってなされている。それは、この場合の「目」とは<視界>を表すというものである。(ここで<視界>とは<遮られずに見ることができる空間>のことである。) この考えによれば、(11)の「目に入った」は(14)と同じように扱われることになる。

(14) 富士山が視界に入った。

しかし、(11)の「目」は<視界>を指しているとは考えられない。まず、<視界>であれば、視覚的対象はそこに入るだけでなく、そこから出たり、そこを通り過ぎたりできるはずである。しかし、「目」の場合はそうではない。次の文が示すとおりである。

(15) a. 富士山は{視界／*目}から出た。

b. その駅はあっという間に{視界／*目}を通り過ぎていった。

次の文も、「目に入る」が、視界の外から中への移動を表すのではないことを示している。

(16) ぼんやり花子を見ていると、突然、スリをしている彼女の姿が目に入ってきた。

この文の設定では花子はすでに視界内にある。突然「目」に入ってきたのは、その視界内で展開された新たな視覚的映像である。

さて、このような視覚対象から目への映像の移動は、その対象が放つ光、あるいは反射する光が、対象から目の中へと移動するという、実際の移動に基づいてはいる。⁸しかし、注目すべきことは、「目に入る」などが表しているのは単なる光の移動ではないということである。私たちはぼんやりと何かを眺めている時には、たとえある対象を視界に入れてはいても、それをはっきりと認識していないことがある。そのような時に次のように言うことがで

⁸ ここでは光の実態は何かといった問題には立ち入らない。

きる。

(17) 次郎の方を見てはいたが、彼の背広の色までは目に入らなかった。目を開けていれば、ぼんやりと見ていても、光は眼球内に入ってくる。しかし、「目に入る」が表すのはそれだけではなく、その光が積極的に処理されその映像が視覚的に認識されることを含む。その意味で、「目に入る」は映像が視覚的認識の中に入ることを意味すると言える。

このような視覚的認識は知覚を行う本人しか持ち得ないものである。したがって、「目に入る」などは認識主体と見なされる人の経験を表す場合にしか使えない。次のコントラストはこのことを物語っている。

(18) a. 富士山が太郎の目に {飛び込んで／入って} 来た。

b. *富士山が太郎の目に {飛び込んで／入って} 行った。

(18b)では「行った」が使われているため、この文は太郎以外の人の視点から語られる場合にしか使われない。このような文では、太郎の認識を前提とする「目に入る」は使えない。「目に入る」が単に光の移動を表すならこのような違いは生じないはずである。「目に入る」における映像の移動は、知覚者の経験に基づく移動なのである。

視覚対象から目への移動は、「見える」においても見ることができる。次のような場合である。

(19) セーターの下からシャツが見えた。

このような表現は、小さな隙間から何かが見えるような場合に限られる。次の差はそれを物語っている。

(20) (遠くにある) ビルの {間／*右側} から富士山が見える。

視覚的放射の場合のカラ格ではこのような制約はない。(21)では「間」「右側」のどちらも可能である。

(21) このビルの {間／右側} から富士山が見える。

なお、このような視覚対象から目への映像の移動は「見る」を使った文には見いだすことができない。(22)のカラ句は視覚的放射の起点としか解釈できない。

(22) ビルの間から富士山を見る。

3.2 映像の移動の経験的基礎

さて、以上のような視覚対象から目への移動はどのようにして生じるのであろうか。これには光の移動以外の理由もある。私たちは、視界内に何か注目を要求する（「目を引く」）ものがあれば、目を動かしてそれに注目を向ける。この場合、視覚対象の方が先に働きかけを行っていることになる。そして、その対象を見ることによって情報を得る時、情報は対象物から知覚者の方へ移動する。それゆえ、対象物から私たちの方に移動が起こるように感じるのである。ここで見てきた映像の移動は、このような視覚経験の中に生じるものであると言える。

先に、映像の移動は「見える」とは両立しても「見る」とは両立しないことを指摘した。「見る」と「見える」の意味的相違は、しばしば視覚的行為と視覚的認識といった対立で捉えられることがある（蔦原 1983, 田中 1999）。映像の移動が視覚認識者としての知覚者を着点とする現象であることを考えると、行為者としての知覚者を前提とした「見る」と両立しないことは自然なことと考えられる。

4. 注視点の移動

4.1 注視点の移動の表現

私たちは、眼球や頭の向きを変えることによって、視線の向きを変え、それにもなつて、視界の中で注目している点、すなわち注視点の位置を変えることができる。このような注視点の移動に基づく表現として、次のようなものがある。

(23) 近くの山から遠くの山に目を移した。

ここで移動物が注視点であることは、カラ格句とニ格句がそれぞれ元の注視点と新たな注視点の位置を表していることから確かめられる。

次の「目を落とす」も同様であるが、この場合は起点句、さらには着点句を省略して使われる場合もある。実際、何も注視しようとせずに、ただ目を下に向けた場合などにも、(24)のように言うことができる。

(24) 彼は目を落とした。

このような場合には、視線の方向の変化に基づく表現だと考えた方がいいか

もしれない。

注視点の移動(一部視線の方向の変化)の表現には次のようなものがある。

- (25) a. 目を上げる, 目を下ろす, 目を落とす, 目を移す, 目を向ける, 目をやる, 目を離す, 目をそらす, 目を走らせる, 目を止める
b. 目が移る, 目が行く

- (26) 見回す, 見渡す

(25)のように、「目」という名詞が使われる場合が多いが、これらの句で表されているのは目（眼球）の移動ではなく、注視点の移動である。しかし、眼球と注視点は視線によって密接に結びつけられており、眼球を動かせば注視点もそれと一体となって動く。そのような関連性ゆえに「目」が<注視点>を意味するものと思われる。さらに、「目を上げる」など一部の場合には、文字通り「目」を眼球と解釈した場合の行為が注視点の移動に伴って起こる。注視点を上方に動かすことは目（眼球）を上向きに動かすことと経験の中で共起するのである。このような共起性も「目」を注視点の移動の表現に用いる動機付けになっている。この意味で、「目を上げる」ではメトニミーが二重に関与していることになる。

注視点の移動の表現は、視覚的放射の表現としばしば区別せずに扱われる(Yamanashi 1997, 田中 2001など)。この二種類の表現の混同は、移動の着点について共通性が高いことによる。注視点を移動させても、視覚的放射を行っても、その移動の着点はともに注視点である。たとえば、「空に目を上げた」(注視点の移動)と「空を見上げた」(視覚的放射)では、ともに(最終的には)空に注視点を向けており、その点では違いはない。しかし、よく吟味するとこの二種類の表現は明らかに異なることが分かる。ここでは、「目を上げる」「目をおろす」「目をやる」(注視点の移動)と「見上げる」「見下ろす」「見やる」(視覚的放射)を比較することで両者の違いを明らかにする。

大きな違いの一つは起点句の解釈である。注視点の移動における起点は元の注視点の位置であり、視覚的放射における起点は眼球の位置である。したがって、新聞を読んでいた人が別の対象へと注視点をずらした場合、この二種類の表現で次のような差が生じる。

- (27) a. 太郎は読んでいた新聞から目を上げた。

b. *太郎は読んでいた新聞から天井を見上げた。

(28) a. 太郎は、新聞から、ちらっと庭の方に目をやった。

b. *太郎は、新聞から、ちらっと庭の方を見やった。

「目を上げる」「目をやる」の場合は、元の注視点の位置をカラ格で表現することができるのに対して、「見上げる」「見やる」ではそれが不可能である。(27b), (28b)が可能であるとすれば、それは新聞が視覚的放射の起点を表す場合（新聞に穴をあけてそこから見るような場合）である。

起点の違いは、次の違いにも反映している。「見上げる（下ろす）」と「目を上げる（下ろす）」における上下の基準である。(29)を例に考えてみよう。

(29) a. *三日月を見下ろした。

b. (天頂から) 三日月の方に目を下ろした。

視覚的放射の場合の上下は、移動の起点である目（眼球）の位置と比べて判断される。したがって「見下ろす」では放射の方向が目より下の方向でなければならない。それゆえ、三日月が自分の目より上にあるという前提のもとでは、(29a)は不自然である。これに対し、注視点の移動の場合の上下は、移動の起点である元の注視点と比べて判断され、目の位置とは無関係である。したがって、「目を下ろす」では、新たな注視点が元の注視点より下でなければならないが、その新たな注視点が目の位置より上か下かは問われない。(29b)に問題がないのはそのためである。

また、継続性に関する違いもある。視覚的放射は継続的に一点の注視点に対して行うこともできるのに対し、注視点が移動する場合は（当然ながら）一つの注視点に継続的に注視は行われない。したがって、継続的な凝視の様子を表す「じっと」は視覚的放射の表現とは両立する場合があるが、注視点の移動を表す動詞とは基本的には両立しない。次の例が示す通りである。

(30) a. 太郎はじっと {空を見上げた／*空に目を上げた}。

b. 太郎はじっと {谷底を見下ろした／*谷底に目を下ろした}。⁹

⁹ 視覚的放射は瞬間的に行われる場合もある。一瞥する場合などである。「見やる」はそのような視覚的放射について使われる。「見やる」は「じっと」と共起しないが、これはそのためであると考えられる。

以上の例のように、「目をVする」と「見Vする」という二つのペアがある場合は、前者が注視点の移動を、後者が視覚的放射を表す。ただし、対応する「目をVする」が存在しないか別の意味を表す場合は、「見Vする」が注視点の移動を表す場合がある。「目を回す」は注視点の移動とは別の意味を表し、かわりに「見回す」がそれを表す。また、「目を渡す」という言い方は存在せず、「見渡す」が注視点の移動と視覚的放射の両方を表すようである。¹⁰

なお、(25)にリストしたもののうち、「目をとめる」は他のものと多少事情が異なる。(31)の「目をとめる」は、注視点をあちこちに動かして、それをある対象のところに止めたという意味である。

(31) 通りを歩いていて、彼女は白い看板に目をとめた。

また、新しい視覚対象を見るために注視点を移動させる場合のみならず、移動する視覚対象に注目し続けるために、注視点を移動させる場合もある。次のような表現はそのような移動に基づいている。

¹⁰ 注視点の移動を表すのか、視覚的放射を表すのか、区別が付きにくい例もある。たとえば、視覚的放射を表す「見上げる」も、次の文では注視点の移動を表すと解釈できるかも知れない。

(i) 彼は急いで空を見上げた。

しかし、この場合の「急いで」は、急いで注視点を動かしたということではなく、急いで視覚的放射に至る行為を行ったという意味であると考えられる。このような解釈は一般的に見られるもので、「ボールを急いで蹴る」においても、「急いで」は、＜蹴る＞という行為自体のスピードのみならず、蹴る行為に至るまでの行為（ボールに向かって走るなど）のスピードについて述べていると考えられる。

逆に、注視点の移動を表すとした「目を上げる」にも、一見視覚的放射の表現かと思われる用例もある。次のような例である。

(ii) a. 花子は空に目を上げていた。

b. 花子は空に目を上げながら...

これらは、注視点を上に移動させた結果状態の継続を表していると考えられる。テイルやナガラがこのような解釈を許すのは、「手を上げる」の場合と同じである。したがって、(ii)を根拠に「目を上げる」自体に視覚的放射の意味があるとする必要はない。

(32) a. 早くて目がついて行かない。

b. その列車は早くて目にとまらなかった。

(32a)は、動くのが早くて注視点の動きがついていかないことを表し、(32b)は対象を注視点にとどめることができなかった、ということであろう。

この注視点の移動に関して、本論はタルミーの英語の類例の分析とやや異なる分析をしている。タルミーは (33)のような例は視線全体の動き（方向の変化）を表すものであるとし、注視点の移動という考えを取っていない。

(33) He slowly looked down.

その場合、次のような文が問題となる(Talmy 2000)。

(34) He slowly looked down into the hole.

この文で、downは視線の下方向への動きを表すと解釈できるかもしれないが、into句に関して視線の方向が穴の中に入るとするのはおかしい。そこでタルミーは、downは視線の向きの変化を、into句は（最終的な）視覚的放射の経路を表すとして、この文には二つの移動が同時に関与しているとしている(Talmy 2000)。しかし、注視点の移動という考え方をすればそのように考える必要はない。(34)は、注視点を下方向に、穴の中へ（さらにその深い位置へ）とゆっくり動かしていった、という意味と考えられる。英語でも、(35)のような場合は注視点の移動を考えなければならないのは明らかである。

(35) He looked from one face to another.

4.2 注視点の移動の経験的基礎

以上見てきたような注視点の移動は、全くの虚構の移動である。私たちがある対象から別の対象へと注視点を移すとき、その二つの視覚対象の間では、現実世界では何も移動していない。この移動は知覚者の視覚経験の中にのみ存在するものである。

このような注視点の移動は頻繁に経験されるものである。日常生活において、私たちは絶えず注視点を変えて、様々な対象の情報を得ようとする。¹¹ま

¹¹ 人は絶えず注視点を動かしている。視覚に関する研究によれば、人はサッケードと呼ばれる眼球運動を平均250-300ミリ秒間隔で行い、注視点を動かしている（乾

た、他の人の視線の変化に敏感に反応し、その先の注視点に何があるかを探ろうとする。さらに、注視点の移動にはある種の身体的なリアリティーがある。それは、注視点の移動のために、眼球や頭を動かしているという点である。

この最後の点は、注視点の移動を表す表現の選択とも関連している。先に、「目をVする」と「見Vする」という二つの形式がある場合、基本的には前者が注視点の移動を、後者が視覚的放射を表すことを指摘した。どうして注視点の移動の場合に、「目」を目的語とした使役移動動詞が使われるかと言えば、それは注視点の移動の方が眼球の向きを変化させるという使役行為と結びついているからと考えられる。

このように、注視点の移動の表現は、私たちが経験する虚構の移動に基づいた表現であると言える。

5. 視覚的虚構移動の身体的基礎と言語表現

5.1 身体的基礎

視覚的虚構移動がなぜ経験的に生じるのかについては、今までも折に触れて述べてきた。また、その移動の性質が言語形式の選択とも関わっていることも指摘してきた（「見る」と「見える」、「目をVする」と「見Vする」など）。ここでは、視覚的虚構移動が視覚のどのような性質によって生じるのかについて、さらに考察しよう。

まず重要なことは、視覚とは、自分とは離れたところにある対象からくる光を感じることに由来する、という点である。これにより、視覚によって、離れた対象と知覚者が結びつけられる。このようにして、私たちの目と、離れたところにある特定の対象との間に、一本の線が想定されるのである。

さらに、視覚は指向性を持った知覚である。これには身体的な基盤がある。

1993などを参照)。ただし、このようなサッケードのほとんどはごく小さな注視点の移動である。「見上げる」などの表現によって表されるのは、かなりの角度で眼球を動かすか、頭全体をうごかすような大きな動きである。

視覚の指向性は、眼球と網膜の性質によって生じる。私たちの目は顔の前側にあり、前にあるものだけを視界に入れることができる。また、網膜の仕組みによって、物体の存在する方向がわかる。眼球に入る光が網膜の上に映し出される時、どの角度から光が入ってくるかによって、映し出される網膜上の位置が異なるのである。さらに、網膜ではその中心部にある窩（fovea）と呼ばれる部分に細胞が集中しており、その点に映し出される映像がもっとも詳細に処理される。注目する対象は、通例この位置に映し出される。実際に私たちがはっきり見ることができるのは視界の中心部の半径2, 3度程度の範囲に限られる。¹²

注視点の移動にも身体的な基盤がある。先に述べたように、私たちが詳細に見ることのできる範囲は半径2, 3度に限られている。したがって、私たちが別の対象に注意を向けるときには、眼球を動かしたり頭の向きを変えて注視点を変えなければならない。実際、私たちの眼球は素早くに動かすことができるようにできており、これが可能である。

このように、視覚的虚構移動は、私たちの身体的特徴によって作り出される現象である。

5.2 他の知覚の表現との比較

視覚的虚構移動の表現の身体的経験性は、聴覚など他の知覚の表現と比較するとよりはっきりする。視覚と比べて、他の知覚の表現においては虚構移動の表現が貧弱である。特に味覚ではその例は見受けられない。これは、味というものが空間を移動せず、味を持つ物体と知覚者の舌との直接的な物理的接触によってしか得ることができないためである。触覚の表現もかなり限られており、熱など、空間内を移動できるものを感じる場合に限って、次のように言うことができる。

(36) ここからもその火山の熱を感じることができる。

嗅覚、聴覚では、視覚同様、二つの方向の表現が可能ではある。次は聴覚の例である。

(37) a. そこから隣の部屋の音を聞いた。

¹² 視覚のメカニズムに関しては乾 (1993), Goldstein (2002)などを参照。

b. 隣の部屋から音が聞こえてくる。

(37)のような表現は、物体の出す音を離れたところで知覚できることから可能になる。知覚者と音源の間に線を想定することができ、その線にもとづいて、知覚者を起点とする放射や、知覚対象を起点とする移動が想定できるのである。しかし、嗅覚、聴覚では、「見上げる」のような特定方向への放射を表すような複合動詞や、注視点の移動に相当する表現は不可能である。これは、視覚と異なり、嗅覚、聴覚が指向性に乏しいことが背景にある。どこから音、においの源があるのか、嗅覚、聴覚のみを用いてそれを正確に知るとは難しい。これは、嗅覚、聴覚の知覚器官の性質による。たとえば、異なる角度から入ってくる音に対して、鼓膜の異なった箇所が情報を処理するわけではない。この点で鼓膜は網膜と異なる。また、鼓膜には窩に相当するような部分がなく、特定の方向から来る音に特に反応することはない。(聴覚の指向性は耳が両側にやや前向きについていること、また、両方の耳が少し離れているために音の知覚に二つの耳でわずかな時間的なずれが生じることなどによって生じる。) また、眼球と異なり耳は(頭全体を動かさなければ)方向を変えることができない。このため、私たちの聴覚は方向性の経験に乏しく、特定の方向への放射を表す表現や聴覚上の注目点の移動などを表現する言語表現が発達していないのだと思われる。

6. 結語

このように、日本語の視覚表現に表れる移動の表現は、知覚者の身体的経験の中に現れる虚構移動に基づくものであり、その性質を反映している。認知意味論は、言語表現をその背後にある外界認識者の認識の反映と考え、そこには認識の身体性が基礎にあると考える。日本語の虚構移動の表現の以上のような性質は、それと一致するものである。¹³

付記

¹³ 紙面の都合で論じることができなかったが、視覚的虚構移動の表現には言語的な制約もある。これについては別稿で論じたい。認知的な基盤と言語的な制約の両方を考えるという立場は、Matsumoto (1996a,b)でも展開されている。

本研究は、科学研究費補助金基盤研究(C)「意味的類型論から見た日英語の比較」（研究代表者：松本曜）に基づくものである。

文献

- 荒 正子 1983. 「から格の名詞と動詞のくみあわせ」 言語研究会（編）『日本語文法・連語論（資料編）』 397-425. むぎ書房
- 乾 敏郎 1993. 『QとAでわかる脳と知覚 人間からロボットまで』 サイエンス社
- 田中聡子 1996. 「動詞「見る」の多義構造」『言語研究』 110:120-140.
- 田中聡子 1999. 『視覚動詞の意味論』（博士論文） 名古屋大学大学院文学研究科
- 田中聡子 2001. 「「目」の多義分析—フレームと比喻複合—」『言葉と文化』（名古屋大学国際言語文化研究科） 2: 61-78.
- 薦原伊都子 1983. 「視覚動詞「みる」・「みえる」の意味記述」『語文』（大阪大学） 42
- 松本 曜 1997. 「空間移動の言語表現とその拡張」 田中茂範・松本曜『日英語比較選書 6：空間と移動の表現』 126-229 研究社出版
- 松本 曜 1998. 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』 114:37-83.
- 渡辺義夫 1983. 「カラ格の名詞と動詞のくみあわせ」言語研究会（編）『日本語文法・連語論（資料編）』 353-395. むぎ書房
- Goldsmith, John. 1979. "On the thematic nature of *see*." *Linguistic Inquiry* 10: 347-352.
- Goldstein, Bruce E. 2002. *Sensation and Perception*, 6th ed. Pacific Grove, CA: Wadsworth.
- Gruber, Jeffrey S. 1967. *Look and see*. *Language* 43:937-947.
- Jackendoff, Ray. 1983. *Semantics and Cognition*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Lakoff, George, and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Matsumoto, Yo. 1996a. "Subjective motion and the English and Japanese verbs." *Cognitive Linguistics* 7:138-226.
- Matsumoto, Yo. 1996b. "How abstract is subjective motion? A comparison of access path expressions and coverage path expressions." In Adele Goldberg, ed., *Conceptual*

- Structure, Discourse, and Language*, pp. 359-373. Stanford: CSLI Publications.
- Talmy, Leonard. 1996. "Fictive motion in language and 'ception'." In Paul Bloom, Mary A. Peterson, Lynn Nadel, and Merrill F. Garrett, eds., *Language and Space*, pp. 211-276. Cambridge, MA: MIT Press.
- Talmy, Leonard. 2000. *Toward a Cognitive Semantics. Vol. I: Concept Structuring Systems*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Yamanashi, Masa-aki. 1997. "Visual perception, tactile experience and spatial cognition." In Masatomo Ukaji, Toshio Nakao, Masaru Kajita, and Shuji Chiba, eds., *Studies in English: Festschrift for Professor Akira Ota on the Occasion of His Eightieth Birthday*, pp. 837-845. Tokyo: Taishukan.